特集

Eメールで対談

パソコンって何だ？

参加者
平野秀秋（法政大学社会学部教授）hhirano@mt.tama.hosei.ac.jp
渡辺潤（追手門学院大学人間学部教授）juwat@res.otemon.ac.jp
服部秀夫（ホームエコノミカ編集人）hhattori@a1.mbn.or.jp

ウィンドウズ95、マルチメディア、インターネットとパソコンをめぐる話題がにぎやかです。これを機会にはじめてみようかと思いはじめた人、やらざるをえなくなった人、まだまだ遠巻きに眺めている人とさまざまだと思います。そのような現状について、あるいはパソコンの正体について、当のパソコンを使って、Eメールでやりとりをしてみようと思いました。特集の発案はもちろん、服部秀夫。それをメールでと提案したのは渡辺潤。物知りのご意見番として平野秀秋を加え、とりあえず実験的にはじめてみました。

パソコンとの出会い

服部：私のセクション（会社全体といった方がいいのですが）は40人ほどいますが、私を除いて全員、端末と向き合っています。あまり気にしていなかったのですが、例のウィンドーズ95騒ぎで、少し関心を持つようになりました。自分だけこの世界を知らないのはやはり異常だ、という実に素朴なきっかけです。

自宅にパソコンを入れたのは、ワイフの要求によります。私は全く受け身でした。もっともワイフもパソコンを知りませんので、当初はもっぱらワープロ専用でした。しかし、それではいかにももったいない話で（と同僚たちから笑われました）、何とかパソコンの楽しさを味わえないかと思うようになったのです。幸いに当社は専門家がいますので、順次、埼玉の山奥まで来てもらって、ニフティとジャストネットを立ち上げてもらいました。

log in 96/08/10 21:30:26 - log out 96/08/10 21:35:42

渡辺：ぼくがパソコンを始めたきっかけは平野さんの勧めでした。研究者として当然マスターしておくべきだというご忠告

だったと思います。1988年頃でしたから8年前になります。それ以前にワープロを3年ほど使っていました。ワープロで十分な気もしましたし、BasicやMsDosなどといったコトバはちんぷんかんぷんで、とても使いこなせるとは思いませんでした。平野さんの勧めにも、腰が引けていましたが、心変わりしたのは、マッキントッシュとの出会いでした。

マッキントッシュは基本的には画面上のボタンをマウスで操作するパソコンで、幼稚園のまだ字を知らない子どもでも使える機械であることを売り物にしていました。アメリカのアップル社の製品ですが、システムが6になった1989年から日本語がスムーズに使えるようになりました。これならできそうだと飛びついたわけです。

最初に買ったのは、9インチの白黒画面がついた小さな一体型のSE30という機種でしたが、部品を追加すると、本体だけで100万円、プリンターといくつかのソフトを買うと150万円を超えてしまいました。

++++++++++++++++++++++++++++++++++++

平野：ぼくは社会学者で、昭和7年11月生まれの63歳です。最近はライプニッツ（なぜか数学史と哲学史にしか名前が出ないあの人です）が、西欧ではものすごく困難であった文化多元主義を守ろうとした人だ、というテーマで研究しています。「ものすごく困難であった」ということは、現代の地球が西欧文明にドップリと浸されると、世界中どこに行っても近代化、工業化、情報化、などなどと金太郎飴状態になることから推察して下さい。西欧文明は普遍性の名前のもとに、実は文化一元主義の病気にかかり、他人にもそれを伝染させる病原体質を持っているのです。その病気が地球を覆い尽くそうとしているのです。

そんなぼくですから、情報化社会礼賛者としてコンピュータを使おう、使うべきだ、というわけはありません。情報など少なければすくないほど、現代人はもっと良く頭を使ってものを考えられるのではないか、と思っているくらいです。ただし、今回の特集の中でのぼくのポジションは、コンピュータ無用論者の役割ではありません。多分この参加者の中では、いちばんコンピュータ歴が長く（最年長だから当然なのですが）、習熟度も高くいちばんコンピュータを道具として使っている方だと思います。ぼくがこの中でいいたいのは、コンピュータは所詮道具なのであって、人間の中身とはなんの関係もない、ということです。

どんなきっかけでパソコンに手を出したかに簡単に触れます。ぼくの場合はアーチー・シェップのレコードに衝撃を受けたことがきっかけといえばきっかけです。1960年代の末です。前衛ジャズのアーチーとパソコンというのは変な取り合わせではありますが、とにかく東京でレコードの置いてある場所を歩き回って、歩き回った中には当然秋葉原も入っていて、そうこうしているうちにシリコンバレーからパソコンという発想が日本に入ってきて、面白いことを考える人間がいるものだという感想がこいつを仕事に使ってやろうという考えに変わって、ちょうどそれにうってつけの仕事をやることになって………という経緯です。その仕事は今ならエクセルなどを使えば簡単にこなせる仕事ですが、当時はそんなものはありませんから自分で専用のプログラムを書いて使いました。以下今日まで8ビット、16ビット、32ビット……と麻雀

式に増える数字のCPUとつき合ってきたというだけのことです。

パソコンを手にして20年以上たっていますが、それでもパソコンは道具にすぎないという考えは全然変わっていません。渡辺潤さんが、コンピュータを使うべきだと薦めたのはぼくだったと言っておいでですが、渡辺さんがコミュニケーション論を専攻しておいでなのでそうお薦めしたのです。お願いした、というべきかもしれません。つまり、渡辺さんのような研究者にコンピュータの可能性も限界も監視していただきたい、と感じたからなのです。渡辺さんが別の分野の研究者だったらそんなことはお願いしなかったと思います。しかしそのときに、これは確実に普及し、良さも悪さも含めて日本人を大波に巻き込むだろうと感じていたことは事実でした。

パソコンは高齢者向き

服部：自由に操れないのに、こういうのも変ですが、パソコンはたいへん奥深い感じがしています。それなりの楽しさはたしかにあります。とくに高齢者に向いています。この点は世評に反しますが、慣れさえすれば多分いろいろな利用の仕方はあるだろう、と今では確信しています。

それにしても、私のような年寄りまで巻き込んでしまう世界とは何なのか、改めて考えてみたいのです。渡辺さんの研究室で、端末を見たり、学生さんとの共同作業の話しをお聞きしたことが、頭の根底にあります。私の周囲では、最も古くから端末をいじっておられたと思います。それとこのような世界を客観的に評価できる社会学者の目が必要です。もう一つ、スポーツ社会学会の機関紙の文章が決定打、あれは面白かったですね。

%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%

平野：服部さんが前回のメールで重要なことを一つ言っておいでです。つまり、パソコンをワープロとしてお使いになった、ということです。そして今回は、パソコンは意外に高齢者向きなのではないかと、おっしゃっておられることです。まず後者に、ぼくもはっきり同感です。パソコンは高級すぎて、子供の遊び道具には向きません。国境を一気に跨げるインターネットのような次元になれば、なおさらです。この話題には後でまた戻ることにして、第一のパソコンはワープロだ、ということも実はもっと積極的に評価する方がよいのではないか、と感じます。パソコンは、よかれ悪しかれ日本に存在しなかったものをもたらしました。タイプライターを使って文字を書くという技術です。そのかわりに筆を使って秀麗な文字を書くという技術というか芸能を失いつつあるのは残念なことではありますが、しかしこのタイプライターを使う技術が文書や文章を書く人の裾野を多いに広げたことも事実です。いまだに、最大のユーザーを持っているパソコンソフトはワープロです。ワープロをあなどるなかれです。現に、コンピュータを道具として使おうという発想は、タイプライターがなかったら出てこなかった発想だと思います。

＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

渡辺：ぼくは学生時代からガリ版をよく使っていました。修士論文も60年代から70年代にかけて出された「ミニコミ」を材料にしたものでした。だから、ワープロを

買ったとき、原稿を書くことの他に、家族や個人、あるいは仲間内のニューズレターが出せるのではと考えたわけです。ところが、当時のワープロは、決まった字体の文字を決まった大きさでしか印刷できません。縦書きもできません。見出しや、挿し絵、写真、それにページのレイアウトに凝ることなどほとんどできないしろものでした。

マッキントッシュについての雑誌記事を読んだときに、DTPという聞き慣れない用語が目につきました。「デスク・トップ・パブリッシング（卓上印刷）」。そこには自分の部屋で、雑誌や新聞に似たレイアウトの出版物がつくれるのだ。という説明が付いていました。あれもできそうだ、これもできそうだと、あれこれ思い描いているうちにほしくてたまらなくなってしまったというわけです。

日本ではまだ発売していない製品でしたから、アメリカからの並行輸入で、マニュアルはもちろん英語。しかも買ってすぐにハードディスクの調子が悪くなって、ハードディスクだけ、アメリカに修理に出しました。戻ってくるのに2カ月ほどかかりましたが、梅雨時の日本の湿度に耐えられなかったという妙な説明を受け取りました。そのため、外付けのハードディスクを1台買い足したり、写真を取り込むスキャナーを買ったり、きれいな明朝体やゴチック体で印刷するために字体を購入したり（1体が5万円もしました）、写真の処理をするソフトにページ・レイアウトのソフトと、使いはじめてから投資した額は、1年経たないうちに200万円を超えてしまいました。「これだけのお金をつぎ込んだのだから、人がびっくりするようなニューズレターを作らねば。」最初の頃は、もう意地になって、思い通りに操作できないのや、機械の調子の悪さでイライラして、胃に潰瘍ができてしまいました。

パソコンって何ですか

服部：編集意図を付け加えさせていただきますが、この企画を進行させながら、ビギナーの私がマシーンに慣れていく、というちょっと図々しいねらいがあるわけです。しかし、読者の中には私と同じ様な状況にある方がたくさんおられると思うのです。その方々に参考になることは間違いない。そしてまた、今の情報社会のある部分には、私のように半ば困惑しつつひきずられている人間が存在していることは確実だと思っています。この状況は将来も変わらないのではないか。そう考える理由は、機能の進歩の速さ、ソフトの日々の多様化についていけない人間は必ずいるだろうと考えるからです。で、そういう意味からもこの企画はたいへん意味があると確信しております。

私の場合は、同僚が心配してくれていくつかのソフトを打ち込んでくれて（インストールというんですね）、それから（つまり私を多少慣れさせてから）インターネット（私はJust Net）、ニフティ（まいとおく）につないでくれたというわけです。ですから私のマシーンは、両先生にご迷惑をかけないように動くはずなんです。ちゃんと動かせば、ですが。それなのにこの企画、これからも私の発言はところどころFAX利用ということになります。

URL http://www.net.co.ac.jp/download.html

渡辺：服部さんがメールで正直に告白（？）していらっしゃるように、実は、メー

ル対談、苦労をしています。しかし、パソコンというのは一つのことができるようになるまでに、かなりの努力と忍耐を要する機械です。とりあえず服部さんにはメールと同時にファックスでも発信しています。「もういらない」とおっしゃるまで続けますから、あせらずにマスターしてください。

ここで、今回参加している三人のパソコンに対する関係を整理してみます。

服部さんは、ビギナーで、このメール対談を通じて使いこなすことをもくろんでいます。ぼく（渡辺）と平野さんにとっては必需品です。しかし、二人のパソコンに対する態度、あるいは、知識はずいぶん異なります。今回のメールのやりとりで知りましたが、平野さんはパソコンが形をなす以前から関心を持っていらっしゃったようです。従ってパソコンをそのメカニズムまで熟知していられます。ぼくは、気に入らないところがあれば、ただ文句を言うだけのユーザーです。このあたりを対照させると、話が分かりやすく、また多様になるのではないでしょうか。

://

服部：それでは、渡辺さんの役割づけに従って、ビギナーとしての体験を語ります。笑わずに聞いて下さい。私の会社では、大半の社員がマシーンをのぞいていますが、私は当然彼らが何のためにそれをしているのかわかりませんでした。というのは、正確ではなく（無知の程度はもっと凄い！）、私はコンピュータというのは、あらゆる機能が内蔵されていて、方法さえ学べば、誰でもどんな目的にでも使えると思いこんでいたのです。だって、経理担当も企画担当も（少なくとも見た目には）同じマシーンを使っているのですから。

今は、おかげさまで少しは進歩して（!?）、ソフトなるものがあって、用途毎にそれをマシーンに覚え込ませているのだ、ということがわかりました。ソフトのアイコンにマウスの矢印を持っていく、という基本動作を知ったときはもうびっくりしました。

www.www.www.www.www.www.www.www.

平野：服部さんの洞察にはまた驚かされました。なんという純粋な感性なのだ、と思います。その通りです。コンピュータはまぎれもなくひとつの万能機械です。できないことは二つだけです。

第一に、運動機能を持っていませんので自動車や飛行機のように運動できません。運動機能を持たせるには運動器官を持つロボットに組み込む必要があります。（擬似的な感覚機能は持っています。キーボードやスキャナーから読んだりすることができます。マイクから聞くこともできます）。

第二に、生命を持つことはできません。コンピュータ・ヴィールスという言葉があるように、その真似をすることはできます。また、人工生態系のシミュレーションに使うこともできます。しかし、これらの真似、つまりシミュレーションは、地球の時空の中で実際に生きている本物の生命に比べると別物であることがわかります。

どこで別物かというと、おっしゃるとおり人間が指示しないかぎり何もしないことです。というわけで、アイザック・アシーモフの「ロボット三原則」に忠実な万能機械です。ぼくはこんなふうに思うことにしています。「この機械はぼくの指示を聞こうと待っているのだ。ぼくがこいつにわからせることができれば、なんでもしてくれる

のだ。ペットをしつけるのと同じようにもっと根気よく付き合ってやろう」と。

しかし人間の指示に従うということは、いいかえるとパソコンがやることはすべて、社会的にせよ個人的にせよ、人間が指示しているということになります。人間というものは、良い指示をすることもあれば往々悪い指示をすることもあります。

@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

渡辺：最近ぼくの大学では各研究室にパソコンが一台設置されました。パソコンを日常的に使っている教員はまだ半数に満たない数でしたが、大学の説明は、電話と同じ備品として考え、拒否はしないようにというものでした。ありがた迷惑に思う人や困惑顔の人、まったく無視してしまう人などさまざまでしたが、ゼミの学生に使わせようとする人、ついでに習おうという人、これを機会にインターネットからパソコンを始めようという人なども結構いて、ちょっとした騒動でした。こんな状況は日本中の大学や企業にありふれた話ではないでしょうか。

そんなときに感じるのは、パソコンに対して多くの人が抱いている、近寄りがたさという感覚です。たとえば、パソコンを使うためには、キーボードを叩かなければなりません。これが第一のハードル。二つ目は、すべてがモニター上の擬似的な机（デスク・トップ）に表示され、鉛筆やペン、あるいは紙を、いわば疑似的な環境として使わなければならない点です。アナログとデジタル思考という対比でよく話題にされるところです。そして三番目のハードルは特殊な用語に対する違和感。

「環境はどうなってますか」というアドバイザーの質問に、「風通しのいいところにおいています」と答えたユーザーがいたという話が、よく笑い話として使われます。確かにおもしろい気はしますが、「環境」という言葉がコンピュータの中の世界を示していることは、ビギナーに分かれという方が無理というものです。どうもこの手の話が多い気がします。パソコンにはちょっとした差で、できない者とできる者を峻別するような、そんなハードルがずいぶんたくさんあるのではないでしょうか。

ワープロ専用機は、少なくとも、この三番目のハードルを軽減させることを考えた道具だと言えます。これは日本独特のものかもしれません。要するに機能を限定させ、使いやすさを工夫して、商品として成立させることに成功したものです。実際、パソコンには二の足を踏んでいる人の中にもワープロはすでに使いこないしているという人がかなりいます。その意味では、ワープロ専用機の果たした役割は評価できるのではないでしょうか。もっとも、パソコンが主流になり始めてますから、ワープロがこれからも独自の商品価値と市場を持ち続けるのはむずかしいでしょうが……。

CONNECT2400,FENICS-ROAD2,HOST NAME,*C NIF

平野：ワープロ専用機のどこが悪いかというと、人間がわざわざ万能機械のパソコンの持ち味である「万能性」を殺して、ワープロにしか働けないように指示してしまったことです。そのくせ、CPUもメモリーも外部記憶装置も入力装置もプリンターも、ほとんど時代の最先端の部品が流用されます。これが時代遅れの部品の流用で、価格も高くても4、5万円であればまた別の考え方もできます。しかし、ワープロ専用機の

価格はこれまでずっとその時代のパソコンと同水準でした。恐るべき無駄づかいです。ぼくなどはワープロ専用機を見ると「ああパソコンが泣いている」と悲しくなったものです。

人間が機械に指示したことは、そっくりそのまま人間に報いとなってはね返ってくる、というのがこの世の習いです。ワープロ専用機を買わされることで、それを使う人はパソコンが万能機械だと感じる機会を奪われるのです。いろいろなソフトをインストールして働くのだから万能機械にちがいない、と服部さんのように感じるきっかけを奪われるのです。「変換」とか「保存」とかが特定のキーボードに割り当てられることも、単能機械の錯覚を強めます。それらが各社でまちまちというのも論外です。ある社のフロッピーは別の社の機械では読めないとなると、シェア確保のための犯罪、といっては厳しすぎるかもしれませんが、最悪の事態ではあります。大局的に見ると、これも人間の指示が間違っていた報いの最たるものです。昨今このようなものがようやく廃れる傾向があるのはよろこばしいことです。

キーボードの問題

服部：渡辺先生の大学で研究室全部にパソコンが導入されたそうですが、それが最近の話、というのに少し驚きました。それと大学の先生でも苦手がいるのだ、とわかって少し安心したり。ワープロでもキーボードになれるまでずいぶん苦労しましたが、パソコンの操作の難しさには閉口してます。

SJIS,OJS1,OJS2,NJS1,NJS2,NECK,EUC

平野：前回、キーボードは読むための感覚器官と申しましたが、パソコンの大革命はまずここにありました。それ以前にパンチカードや穴あきテープが使われていた位置に、タイプライターが登場しました。そしてそのすぐ後に、昔タイプライターの紙であった役割を、ブラウン管が受け持ちました。こうしてパソコンの大革命は、この万能機械がそれを必要とするあらゆる人に奉仕できる道を開いたのでした。

もうひとこと加えます。キーボードは読む疑似感覚器官ですが、出生の土地柄を反映してローマ字しか読めません。そこでまたワープロが重要だったのです。ワープロに付属している心臓部に、FEP（Front End Processor）があります。ふつう「辞書」と呼んでいるものです。フロントエンド（最先端部）と呼ぶ理由は、キーボードの入力を受け取る最先端に待機していて、ローマ字「子音＋母音」の組み合わせを「ひらがな」に翻訳し、即座に辞書を参照して日本古来の漢字仮名交じり表現に置換するからです。つまり、日本のパソコンには英文表記を日本語表記に変える有能な通訳が住み込んでいるのです。

それだったら、日本で販売されるキーボードに「ひらがな」の刻印は本当は必要ないはずです。しかし買うと通常これが付いてくるのでもっとも普及しています。ぼくとしてはワープロ専用機時代の悪夢の名残のような気分がしますが、これの無いいわゆる101キーボード（キーの数が101、ちなみにひらがな刻印のあるのが106）を特注すると1万円余計にかかるので我慢しています。それにしても、こんな訳ですから「ひらがな」刻印でキーを押すのはどなたも

なるべくおやめになった方が賢明と思います。さもないとローマ字を書くときに不便になると思います。

なに、日本特有の不便などとひがむ必要はないですよ。ドイツ語の「チョンチョン帽子（ウムラウト）」とか、フランス語の「アクサン」とか、スペイン語の「？の宙返り」とか、北欧語の「串刺し団子」とか、結構世界の文字は個性があって、みんなそれなりに苦心しているのです。しかし個性があるから文化が成り立つ以上これは価値あることだと思います。日本のあるワープロソフトメーカーが、その優秀なFEP技術をかわれてアラビア語ソフトの開発に苦労した話を聞いたことがあります。

そんなわけで（突然ですが）、ぼくとしてはなんといっても日本と中国と台湾と韓国との漢字コードの統一が実現してほしいし、さらに世界中の文字を表現できる「統一文字コード体系」が早く実現してほしいと切望しています。これは国際的なインフラ整備で、そのための社会投資はゲームソフトを売るためのマルチメディア化などとは比べものにならない重要性を持っています。このための場は持たれようとする機運がありますので、いずれは実現する可能性皆無ではありません。それまではささやかな国際問題への貢献として、自分のwwwページに李白の詩を載せて世界の人に鑑賞してもらおうと、グラフィック・ソフトで画像にして英訳を付けたり、とかしています。

Ч Ъ ÜÜÖÖÄÄÉÉïïùùòòææÇÇÑÑÂÂØØ Ë Й Ф

渡辺：服部さんの今回のチャレンジの様子でも分かるように、広告の歌い文句とは違って、「ウィンドウズ」になっても、パソコンはまだまだ使いやすい機械にはなっていないということがわかると思います。パソコンの万能性をもちろん否定はしませんが、一方では、限りなく使いやすい道具になって欲しいという要求もあります。ぼくのようなコマンド入力には抵抗のあるパソコンユーザーとしては、「パソコンをパソコンとして感じさせるようなパソコンはパソコンではない」と言ってみたくなります。

もちろん、コンピュータが特殊な「言語」によって動いていることは承知しています。けれども、その言語は伏流水のようにして存在すればいいものであって、表面に登場すべきものではないだろうと思います。平野さんには以前に同じような内容のメールを出して「だからマック・ユーザーは困るんだよな。コンピュータのこと何も知らないくせに、いろいろやりたがって」と言われたことがありました。しかし、今は車の運転だって、ドライバーの気づかないところでさまざまに電子制御の装置が働いているのです。車は平野さんはマニュアル・シフトでぼくはオートマチックです。趣味の違いといったら平野さんに叱られるかもしれませんが、パソコンも、何に関心を持って、何がやりたいのかということによって多様に選択できたらいいのではと思います。

最近のブームの火付け役になった「ウィンドウズ95」は、オートマチックを可能にした新しいシステムですが、ぼくが使っているマッキントッシュは、この方式を十年以上前から採用していました。ウィンドウズ95の人気でマックが売れなくなって、アップル社の将来を危ぶむ記事がずいぶん出ています。マックのメリットがなくなったという人もいれば、マック・ファンからは「ウィンドウズ95はマック89にすぎないじゃないか」という反論がされます。

ぼくの研究室には両方の機種が一台づつあります。判官びいきかもしれませんが、使い比べた感じでは、画面のデザインや操作方法などでマックの方に一日の長があるのではと思っています。しかし、寄らば大樹の陰というか、大勢に従うという風潮が強くなるのは残念なことだと感じます。

Bitmap, Draw, PICT, TIFF, EPS , JEPG, BMP, PCX, Targa,DV,

マニュアルと言語の問題

服部：実は６年ほど以前、岐阜県下の小・中・高校の情報教育の普及ぶりを取材したことがあります。養老町の小学校にパソコンクラブがあって、放課後、生徒たちが顔を輝かせてクラブに集まってくるんですね。そして好き勝手に機械の前に座ってキーをたたき始め、何というのか知りませんが、雑誌のマンガを自分の画面に映して自分流のレイアウトをしているんです。先生のお話では、台数に限りがあるので、この生徒たちは幸運にも抽選で当たった生徒なんだそうです。岐阜県は公立校のパソコン普及率は今でも日本有数の高さだと聞きました。

その取材を通じて私は、今日の事態を想定すべきでしたが、残念ながらそうはなりませんでした。取材用にテクニカルタームを一応は憶えたのですが、取材を終われば見事に頭から消えていきました。実際に機械にさわっていなければ、用語の多くはとても憶えてはいられません。「無縁者」にとってはあれは日本語ではありませんから。

実は今でも、マニュアルの日本語を日本語として読んでいる感覚はありません。私のような年配のしかもビギナーが、マニュアルだけを頼りに操作法を学ぶことはおそらく不可能だろうと思います。記憶によれば、初期のコンピュータは、新しい言語を創出することにたいへん苦労したのではなかったか。これも10年程前のことですが、各企業のシステム開発担当者の会に同席したことがあります。彼らは盛んに「言語」(横文字交じりの会話なので私にはさっぱり理解できなかったのですが、たぶん主たるテーマは「言語」だったと思います）のことを論じ合っていました。

今日、パソコンを自在に操る世代は、全く新しい日本語を駆使しているに違いありません。ある文章を読みきらないでも、彼らはその文章が何を指示しているのか、直ちに理解してしまうのでしょう。相変わらずの嘆き節ですが、今の私は悲観論者では決してなく、「言語」が増えた分、文化は豊かになったのだと考えられるようになりました。もう直ぐ私自身も参加できる新しい文化です。とは言え、利用しないパソコンは家庭内の粗大ゴミです。一時私もヤケになって捨ててしまおうかと思いました。実際にウチのカミさんは粗大ゴミとして捨てようとしたのですが、重くてひとりではとても動かせないのであきらめた、と言っています。（よかった！）

GO TELNET, log in open xxxxx set term -x SJIS, mailx,]

平野：今回はわたくしもすこし人間寄りの話をさせていただきます。

まず、服部さんどうぞパソコンを粗大ゴミなどとおっしゃらず、たとえワープロとしてでも道具として可愛がってやって下さい（正確には、と奥様におっしゃって下さい)。さもなければ、どうせ粗大ゴミと思って一度バラしてごらんになってはいかがで

すか。あとで申し上げるように結構色々なことが一度に理解できますですよ。といった以上、もとに戻すのはお手伝いします。

服部さんがおっしゃるように、この方面では聞いたこともないようなローマ字の記号が出過ぎることです。この業界、たしかにすこし業界符丁を無造作に一般化してひけらかす悪習が過ぎるところがあります。それだけ未熟な文化だ、ということでしょう。「オブジェクト・オリエンテッド」などと大昔に使われた用語を最新技術のように振り回して、知らないと阿呆のように見下すというのは、ぼくも我慢がなりません。これなどは、「早い話がマウスをクリックするだけという意味です」と正直にいいかえるべきです。

しかし一般に若干の技術用語が、それもローマ字略号で使用されるのは、やむを得ない部分もあります。どこまでがやむを得ず、どこが行き過ぎか、という問題は難しい判断を要します。

やむを得ない例として、パソコンでなく、フイルムの感度をとりましょう。これを「ASA」とか「ISO」で表し、このフィルムは「ISO-100」ですがあれは「ISO-400」です、のように表現したのはご承知の通りです。前者は暗いところには向かないが銀粒子の肌理が細かく、後者は「絞り２つ分」暗さに強いが粒状性に留意する必要がある、ということは、写真とカメラを大事にする人にとっては、最低の常識でした。これと同じ事情は、パソコンとて機械ですから当然あります。というより、構造が複雑化した分だけ増加します。

たとえばかりに、「このソフトは『プレーンテキスト』にしか対応しません」という表現が必要になったところで、プレーンテキストとは何か、ということを（マニュアルの中で）縷々説明するわけにもいかないでしょう。ここはユーザーとして用語辞典でもなんでも引いて、急遽その正体を突き止めていただくしかないわけです。つまりこのケースは、ユーザーが最低必要な知識を持ちあわせていない場合です。最近はパソコン上で引けるコンピュータ用語辞典も数種類登場していますので、こういうものを活用するのも一つの方法かもしれません。さらに、昨今のハードディスクの大容量化のせいで、ほとんどのソフトが「オンラインヘルプ（メニューの中で開くヘルプ項目）」を持っていますので、これでたいていのことは間に合う場合が多いです。

また、一度パソコンの中を開けてみるとはっきりわかるのですが、内部部品のメーカーは台湾、シンガポール、カナダ、米国、日本、と世界中に広がっています。ある種の国際語がないとやっていけない世界であることはカメラやフィルムの比ではありません。このへんものみこんだ上でユーザーも基礎知識が必要なのです。（ついでですが、この知識の量とお金を有効に使う可能性が正比例するのは車を買うような場合と同様です）。

さて、上記とまったく同じような事例が、じつはこれとまったく逆のケースにも利用できます。たとえばここに、どんな「みてくれ」の文書でも書けることを売り物にしたワープロがあったとします。よくＣＭにあるように絵を入れたり地図を入れたり、の文書です。ところで、この文書をそっくりそのままメールで送れるかというと、それはだめです。メールが受け付けてくれるのは裸の（文字コードだけの）「プレーンテキスト」だからです。すこしややこしくな

りますが、メールには「貼り付けファイル」という方法があって、もし相手が同じソフトを持っていれば、この方法によってそっくり送るという方法を達成することは可能です。しかし、今このことを別にすると、仮にそのワープロのマニュアルが「これであなたのインターネット・ライフは充実」などと謳っていたとすると、これはマニュアルの落ち度というしかありません。ぼく自身の経験では、ワープロソフトで「プレーンテキスト」による保存方法を真っ先に書いてある例をほとんど知りませんので、このあたりの問題もあると判断されます。

よいマニュアルかどうかということがしばしば問題になります。要は初心者にとって肝心のパソコンが使いやすいということでしょう。しかし、「まずマニュアルを読んで、それから使う」という使い方はやらない方が賢明と思います。やってみて、特別なことが「必要になったらマニュアルを見る」というほうが本当だと思います。ぼく自身は、ごく薄いマニュアルですむ以上のことはソフトに期待しない、という方針で通しています。

UPLoad TYPe:TXT, DOWn PRO:BPL, UPLoad TYPe:TXT

渡辺：ワープロからパソコンに乗り換えたときに困ったのは、データをどうやって移すかということでした。パソコン通信を使って自分（ワープロ）から自分（パソコン）に送るというやり方がありましたが、ワープロの通信機能を改めて買い足すのはもったいないし、新しく買ったパソコンにしても、それで通信をする気はありませんでした。で、ワープロとパソコンをコードで直結して、擬似的に通信が可能な状態にして転送したわけです。ワープロとパソコンのメーカーそれぞれに相談しましたが、もちろんこんなことは教えてくれませんでした。ある雑誌で偶然、コードの作り方を書いた記事を見つけたのですが、はんだごてなど一度も使ったことがない技術音痴にはどうしようもありませんでした。で、パソコンを買った店に行って、雑誌を見せて、無理矢理お願いしてその場で作ってもらったわけです。もちろん材料は、大阪の日本橋で自分で調達しました。

そのすぐ後に、MS-DOS のファイル変換が可能になりましたが、メーカーごと、あるいはワープロなどは機種間でのデータのやりとりもできないことが、ちょっと前まで、そのままにされてきたわけです。ぼくはゼミの学生の卒論を毎年文集にしていますが、学生はそれぞれバラバラな機種で論文を作成してきます。そして、ワープロを使う学生のほとんどは、自分の使っているフロッピーがそのまま、どの機械にも利用できると考えています。で、ファイル変換の話をいちいちする羽目になります。ところが、マニュアルなどはほとんど見ずに使っていますから、「そんな機能あるんですか？」ということになって、うまくいかない場合には、「そのワープロごと学校に持ってこい!」となってしまいます。

これは、メーカーが市場のシェアのことだけ考えて、ユーザーに苦労を強いるいい例だと思います。独自性は商品には不可欠の特徴かもしれませんが、共通性を排除する形でやるのは、結局、自らの発展も妨げてしまうのです。

パソコンの基本精神

服部：「言語」については、ちょっと筆

（キーボード？）がすべりました。マニュアルのわかりずらい日本語を皮肉りたかっただけです。それと。ゼミの学生さんの話、ぼくもちょっと耳が痛いです。しかし、いろいろ問題があることはよくわかりました。

TO:, SUB:, FROM:, CC:, Bcc, RR, RE:,INET: POP

平野：前回とは逆の指摘ですが、最近パソコンの性能が上がったせいで、アプリケーション・ソフトが、あれもこれもできる、という「付加価値」に力点を置きすぎる傾向が出てきているように感じます。電話帳のようなマニュアルが、いってみればこの「おかず」にすぎないものを説明するために付属するようになったとしたら、これはこれであまり歓迎すべき傾向とはいえません。マニュアルは機能の使い方の象徴ですから、こんなことで厚くなられてもややこしいだけなのです。これは必ずしもユーザーが悪いのではなく、メーカーのポリシーに責任の一端があります。

ただし、かりにそんなソフトがたくさん売れるとしたら、これはまた買う方が悪いという理屈も成立しますからユーザーとて無縁ではないのですが。現に、商用ネットワークなどを一覧すると非常に多くのいわゆる「フリーウエア（無料で使えるソフト）」や「シェアウエア（試用して良ければ少額を支払う）」ソフトが提供されていて、なかには非常に優秀なものがすくなくありません。服部さんもメールを開かれたついでにどれかのフォーラムに入って、ライブラリーを参照なさるとよいと思います。これらには分厚いマニュアルなどないし、またほとんど必要もありません。実はこのメールも中村匡志さんという方が作成された「Almail」のベータ版を使って書かせていただいているのですが、使い勝手も信頼性も抜群です。

つまりはこの問題、「賢明なユーザーのみが賢明なメーカを育てることができる」という、商品社会の古くて新しい鉄則に戻るしかないのです。その場合フリーウエアやシェアウエアの作者が多大な時間を使ってぼくらに訴えていることは、商品社会だけが社会じゃないよ、というきわめて重要なメッセージなのです。パソコンとはもともと何であったかということを、考えてみて下さい。膨大な金をかけて専用の要員を雇わないと動かせなかったコンピュータを分権化し、普通の人間が、誰にでも手の届くものにしたのが、パソコンなのです。その基本精神からいうと、過度の商業化はこの大原則に反しているといえないでしょうか。パソコンのユーザーとは、なによりもこの基本精神を心のどこかに持っている人であってほしい、というのは言い過ぎでしょうか。

^_^" ^_^" ^_^" ^_^" ^_^" ^_^" ^_^" ^_^" ^_^" ^_^"

渡辺：平野さんの指摘には納得、というか反省させられる部分がたくさんあります。

ぼくがパソコンをはじめた時点では、すでにパソコンのハードもソフトもそれなりの機能を備えた商品として確立していました。だから、ぼくにとってもハードやソフトの選択は、あくまで、消費者としてのそれにすぎませんでした。

ただ、パソコンの誕生やその発展の経過にふれれば、平野さんが言うパソコンの基本精神はすぐに理解できますし、パソコンに付与する意味とかイメージもずいぶん変わったものになると思います。ぼくがマッキントッシュにひかれたのは、なによりカ

ウンター・カルチャーの臭いがするというキャッチフレーズが気に入ったからでした。60年代にアメリカから発生したカウンター・カルチャーには既成のライフスタイルを見つめ直し、新しい自前のものを創り出そうという特徴がありました。典型的なものとしてはロック音楽やアングラ新聞・雑誌、ポップ・アートなどでしたが、それは衣食住のあらゆる部分にもおよびました。コンピュータは、人間を管理し、戦争の道具として不可欠になった冷たくて巨大な機械である。コンピュータについて描いていたこんなイメージを払拭するパソコンが存在することを知ったときの驚きや感激は、今でも生々しく記憶しています。

もちろん、カウンター・カルチャーから生まれたものは、自前というポリシーとは裏腹に次々と新しい商品として取り込まれていきました。ロック音楽が日常生活のなかにサウンドトラックとして溢れだし、ジーンズやTシャツが若者に限らないごく当たり前の普段着になる。「ドゥ・イット・ユアセルフ」を売り物にするあらゆる道具を扱う量販店、あるいは自然食のブーム。それらはどれも、誕生当時の精神からはかけ離れてしまったように見えます。同じことは、ちょっと遅れて登場したパソコンにも言えるでしょう。

もっとも、ロック音楽と既成のレコード会社やメディアの関係に明らかなように、カウンターカルチャーの中には、商業主義を前提にして発展したものが少なくありません。また、カウンター・カルチャーが自己に名声や富をもたらす機会であることを、たとえ無自覚であれ、あるいは結果として気づいた場合であれ、多くの者が持っていたはずです。

実際パソコンの世界からも、アップル社のスティーブ・ジョブズ、マイクロソフト社のビル・ゲイツに代表されるようなアメリカン・ドリームの体現者が数多く登場していますし、つい最近でも、インターネット用のソフト「ネットスケープ」（最初は「モザイク」）を考案して社を起こし、あっという間に億万長者になったイリノイ大学の学生グループがいます。彼らも、出発点はコンピュータの世界に魅せられた人たちでした。それはちょうどビートルズやローリングストーンズがロックンロールに夢中になって自分たちの音楽を創り出していったのと同じ構図の中にあります。

佐伯啓思はアメリカニズムを「リベラル・デモクラシーと結びついた経済普遍主義」と定義していますが、アメリカから生まれたものには、必ず、この要素が含まれていて、それはカウンター・カルチャーもパソコンも例外ではありません。

パソコンは成熟した大人の機械

平野：ものごとは流行すると当初の精神とは縁もゆかりもないものになりかねない、というのが現代社会の憂鬱な現実です。前回のフィルムの感度の例をもう一度引きます。一眼レフがたいへん進み、それとともに写真に関心を持つ人が増えると、もっともっとカメラとフィルムを消費（浪費）してもらいたい、という動機も強くなるのが現実です。こうして、カメラとフィルムは例の「オートフォーカス、フラッシュ付き」という時代になり、やがて観光地で売っている「レンズ・フィルム一体型使い捨て」写真の時代になります。この辺から、フィル

ムの感度と粒状性に関する知識などは、だれも気にしなくなりました。暗ければ勝手にストロボが光ってくれるのですから、カメラとはチーズといって光らせるもの、という現実が出現しました。なにが写っているのか、どう写っているのか、などはだれも気にしなくなりました。

これを写真の大衆化というか写真の終焉というか、たしかに議論の分かれるところでしょう。しかし、なにか大事なものが変化し、写真が熱くなくなったことはたしかです。じつはこれと同じことが、「パソコンを簡便にしたい」という営業努力の過程から生じるかもしれない、というのが次の問題点なのです。道具ですから、簡便なことはよいことですが、マニュアルの手間を省こうとする程度が行き過ぎると、なんでもかんでも組み込んで、ユーザーは決められたところをマウスかなにかでクリックするだけで「使えちゃう」気分にする方向が大勢を占めることがないとはいえません。そういう市場さえあれば、やろうと思えばすぐにでもできます。こうなると写真の二の舞いで、要するに万能機械がまたまた単能機械に逆戻りすることになるのです。とくに、最近のようにパソコンがオフィスの中の専用回線や電話線でネットワークに結合されると、このネットワークのどこに中央集権の魔の手が伸びてもおかしくない状態が強くなる、という危険は現にあるのです。

要するにパソコンも情報やメディアという分野に属するものではありますが、機械であり道具であることは間違いないのです。機械なら、人間が賢明に使えば賢明になれるし、人間がだめならパソコンもだめになるのです。持ったとたんにだれでも作家や学者や芸術家になれる道具、などというものは絶対にあり得ないのと同じです。「あなたも明日からアーチスト」などというＣＭほど人をおちょくっているものはないかもしれません。逆に服部さんが取材されたこと、すなわち文部省が初等・中等課程へのパソコン教育導入に踏み切り、先生方が懸命に努力しておいでのことは、ぼくにとっては快挙です。教える人材の養成まで視野に入れると順調でも10年以上かかるのではないかと思いますが、できればその教育の中で、どうかパソコンを賢明に使うのは人間だということを、かならず重点的に教えてほしいものと期待しています。それでもなお、ぼくらのようなロートル（というと渡辺さんや服部さんには悪いですが）がこの自明な道理を、来るべき子供たちに教える必要があるでしょう。かくして、やはりパソコンは精神的に成熟した大人が主導権を取るべきもの、ということになります。

&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&

渡辺：平野さんは前回、「フリーウェア」や「シェアウェア」の大切さについてふれられました。ぼくも、通信用のソフトやシステムを補う、あるいは改善する単機能のソフト、それに役には立たないけれども楽しさを補強するアクセサリーや簡単なゲームなど、利用しているものは少なくありません。ユーザーが作るそのようなソフトが、実はパソコン文化の土台をなしていることは、もっと強調する必要があると思います。

また、パソコンはその利用に限っても、いろんなことができる機械です。文章を書く、絵を描く、デザインやレイアウトをする、音楽を作る、ビデオや写真を撮って加工する。雑誌や新聞を作る、ゲームをする。手

紙を出す。しかし、これも平野さんがおっしゃるように、機械さえあれば何でも即座にできるようになるといったものではありません。とはいえ、このようなことにある程度の興味があって、すでに身につけた多少の技術や知識があれば、パソコンは決してこわい機械でも、むずかしい道具でもないと思います。

パソコンは、使用者の目的に合わせて七変化する道具。そして、道具自体を使用者が作り変えたり、改良したりできるもの。

パソコンには、それを使って体験する世界がこれからもどんどん広がっていくのではと感じさせる可能性があります。その可能性の実現は、基本的には、ハードやソフトの性能の向上にかかっているのかもしれません。しかし、その可能性を実際に経験するのは、あくまで使う者であるべきだと思います。

!?!

服部：思いがけず想像もできなかった世界を覗いてしまったおかげで、わが家のパソコン、粗大ごみにならずにすみました。様々な形で様々な人たちが、パソコン世界に巻き込まれて行くんだろうナ、と感じています。けれどもハードとかソフトのメーカーのムードづくりの巧みさ、ちょっとこわいですね。人間が機械を動かすのだ、というご指摘を改めてかみしめねば。

log in 96/08/05 14:35:12- log out 96/08/24 23:46:25, From juwat@res.otemon.ac.jp, To hhirano@mt.tama.hosei.ac.jp, hhattori@a1.mbn.or.jp

と、まずこんな形で話に区切りをつけてみました。この間およそ１カ月、服部さんはまだ、「ファックスいりません」とはおっしゃいません。彼のメールは相変わらず、別の方の名前でやってきます。また、予定したテーマがずいぶん残ってしまいました。ウィンドウズ95、インターネット、マルチメディアといったにぎやかな話題です。今回のメール鼎談、反響が心配ですが、残った話題について、もう一回特集を組ませていただこうと思います。編集者の服部さんに感謝！ですが、「服部さん、ぼちぼち、仮免許でもいいですから、ひとりでドライブに出かけてください。ネット・サーフィンもなかなかおもしろいですよ。」

それから、実際にやりとりしたメールは、ここに掲載したものとは少し違っていることを断っておきます。Eメールは手紙と同様、思うままに気楽に文章が書ける道具ですが、そのぶん、一回の量が長くなりすぎたり、話題からずれた内容になってしまったりということがおきがちです。そのままと思いましたが、読みやすくするために、多少の修正を渡辺の責任で施しました。